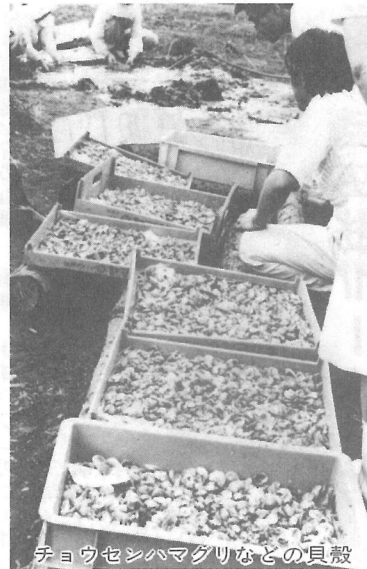


## 山海の珍味も豊富



チョウセンハマダリなどの貝殻

この頃の食べ物は、動物では鹿、猪、海の魚、貝などですが、遺跡からは鹿の骨、貝ではチョウセンハマダリ、ダンペイキサゴ、ヤマトシジミ、フジナミガイなどが出土、植物はクリ、ドングリ類、自然落などで、遺跡からはクルミと思われるものが出ています。さらに、このクルミなどの木の实などを貯えるために、さかんに貯蔵穴が掘られるようになり、これによって遺跡は蜂の巣のようになっていきます。



## 出土した縄文式土器

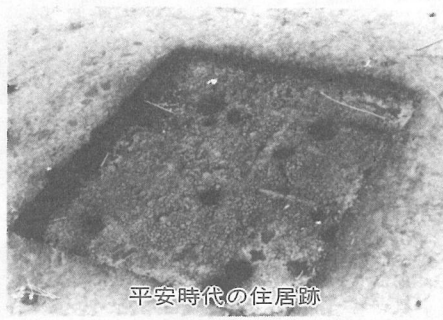


縄文時代中期の中頃がこの遺跡のもっとも栄えた時で、住居跡、土壇、土器などもっとも多く出ています。この

時期は、前半の阿玉台式土器と後半の加曾利E式土器との間で、複雑多様な土器が出ます。ちょうど縄文中期の変革期になるわけで、時間的変化だけでなく地域的な影響もあって、東北地方の土器の特徴を持った土器も出ています。このことから、この時期は人々の動きが頻繁で、その社会が流動的に変化していったと思われまふ。しかし、生活は前と変わらず、豊かな幸があり、装飾品もあつてゆとりが感じられます。

縄文中期の後半になると、

初めのうちは住居跡も土器も多いのですが、次第に少なくなつていきます。そして後期中頃以降の住居跡、土壇などはなくなりまふ。



平安時代の住居跡

この次に遺跡に移り住んだのは、時代が下つた今から一千百年ぐらゐ前の平安時代です。

この時代の住居跡も、地面に穴を掘つた堅穴住居ですが、形は方形になり、堅穴の一角所にカマドを設け、そこでご飯を炊いていました。

平安時代の住居跡は十六軒あつて、台地全体にちらばつていますが、わずかの間住んでいただけで、すぐに姿を消

してしまいました。

また、最も今に近いものは、四、五十年前の炭焼き窯がいくつかあります。

このように東長山野遺跡はいくつもの時代にわたつて人々が住んだりしましたが、なかでも縄文時代中期は海と陸の幸にめぐまれ、最も栄えたときであることがわかりました。

協力・日本考古学研究所  
調査員 道澤 明氏



時の移り変わりを象徴するかのよう、発掘調査現場上空には絶え間なく、飛行機が爆音を響かせ通り過ぎてゆきます。

この発掘調査は、今月中旬まで行われ、その後は、ゴルフ場に造成されます。

見学ご希望の方は、教育委員会（内線68）へご連絡ください。